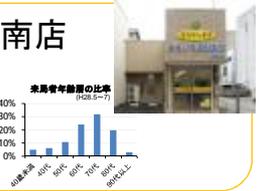


要旨

超高齢化社会及び疾病の複雑化に伴い医療費の増加が問題となっているが、その一つの要因として残薬問題が挙げられる。そこで、残薬調整の啓発活動を行い残薬持参袋を活用することで、どの程度医療費削減ができたかを調査し、薬局薬剤師の果たせる役割について考察した。

ぼうしや調剤薬局城南店

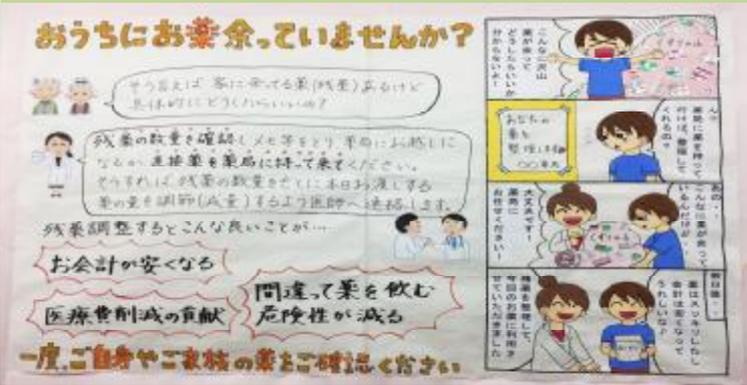
内科、循環器科、胃腸科の処方箋を主に応需
月処方箋枚数：約1600枚



方法

平成27年9月からポスターの作成・掲示、声かけ、平成28年3月から残薬持参袋の作成・配付を行い、これらの啓発活動を評価するために平成28年5月～7月に残薬調整件数および調整点数の調査を行った。また、活動を行っていなかった昨年の平成27年5月～7月と残薬調整者数を比較した。

① 残薬調整ポスターの作成・掲示



② 残薬持参袋の作成と配付・回収

残薬ありと判明した方の中で希望された方に配付し、次回来局時に持参して頂いた



③ 残薬調整前後での医療費の差額算出

▼算出方法(例)

処方	1錠分	回数	42日分	調整後
1) アーチスト錠10mg	1錠	分1 朝食後	42日分	→ 31日分
2) タケプロンOD錠15mg	1錠	分1 夕食後	42日分	→ 13日分
3) エパデルS800	2錠	分2 朝夕食後	42日分	→ 26日分
4) フランドルテープ40mg	1日1回		42日分	→ 0日分

薬料 1778点 → 836点
942点の削減

④ 残薬調整者に対し薬が余った理由についてアンケートを実施

結果

残薬持参袋希望者31名に配付(H28.3~6)
うち18名回収(H28.5~7)
残薬持参袋回収率：58%

残薬調整者※：85名 男性34名 女性51名



取り組み前との比較：1年前 H27.5~7
残薬調整者：42名 男性19名 女性23名

※残薬持参袋だけでなく、声かけ等により残薬調整を行った全ての患者人数

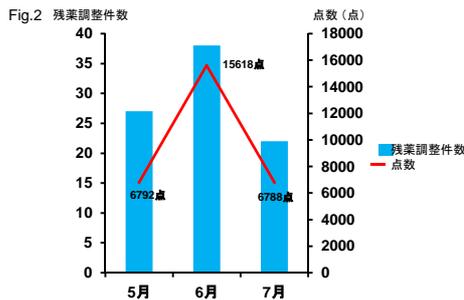
残薬持参袋で持参された薬



残薬金額
約4.2万円
(薬価)!

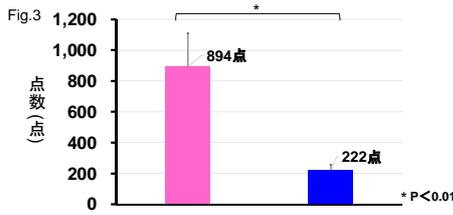
この中には
中止薬も...

残薬調整件数と調整点数 (H28.5~7)



3ヶ月で29198点(29万円)の削減に繋がった

残薬持参袋の有無による残薬調整点数の比較

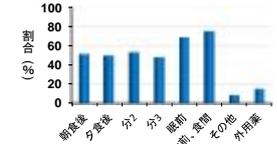


残薬持参袋を利用した方が、多くの残薬調整に繋がった

統計学的処理
得られた差額は、平均値±標準誤差(S.E.M.)にて表示した。また、有意差検定には検定を適用し、有意水準は1% (両側) 未満とした。

用法別の割合

Fig.4 残薬調整者の用法に対する残薬の割合



食後の残薬と比べて、食前・食間、眠前の残薬が多かった

薬効別の割合

Fig.5 残薬調整数

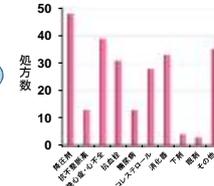
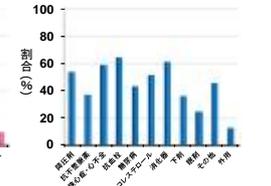


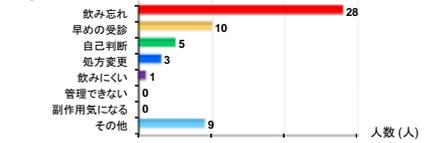
Fig.6 残薬調整者の処方に対する残薬の割合



残薬調整対象は降圧剤が最も多く、処方に対する残薬割合は抗血栓薬が最も高かった

アンケート集計結果

Fig.7 薬が余った理由(複数回答可)



飲み忘れが最も多く、次いで早めの受診や自己判断による休薬が多かった

考察

- 残薬調整についてのポスター掲示・声かけによる啓発活動により、患者の認知度が向上し残薬調整件数の大幅な増加に繋がった。また残薬持参袋を活用することで、より多くの残薬を持参してもらうことができ、残薬調整点数を有意に増加させることができた。これは残薬調整における残薬持参袋の寄与が大きいことを示している。
- 残薬持参袋の使用は、中止薬も持参して頂くことで誤った服用を防ぐことに繋がるため、安全な薬物治療における重要な役割を担うことができると考えられる。
- 残薬が多く発生している現状については、患者の理解度に応じた服薬ケアに努めアドヒアランスの向上を図る必要がある。加えて、早めの受診を繰り返すことで生じた処方日数の重複期間の解消など医療機関と連携を取っていくことも重要だと考える。

今後の展望

今後は、残薬調整を行うことで医療費削減だけでなく残薬が生じた背景・要因について適切に対処し安全な薬物療法につなげていきたい。



ぼうしや薬局では、自社の節薬バックを作成し、残薬削減にグループ全体で取り組み始めました。